

# この度、世田谷区産業表彰を受賞し、 当社の製品開発への取り組みが 東京新聞(11/2付朝刊)に掲載されました

H24年10月20日(土)、区内産業の振興に貢献したとして、区長特別表彰(団体)を受賞し、第46回世田谷区産業表彰式に出席しました。

また、それを受け東京新聞に当社の技術や取り組みが紹介されました。

～東京新聞11/2付朝刊本文より～

## 「町工場支えた 技術とひらめき プラ真空成形50年 世田谷区が産業表彰」

健康診断でおなじみの折り畳み式採尿コップは、四十年前に世田谷区の町工場で生まれた。開発した相川合成樹脂工業所(尾山台一)が先月、区内産業の振興に貢献したとして区産業表彰を受けた。社長の相川新太郎さんは「国外では太刀打ちできない技術と、少しのひらめきが大事」と町工場生き残りの秘けつを語る。

(小形佳奈)

工業所は相川さんが1960年に創業した。1970年代初め、採尿コップは受け口が円い紙製が主流だった。一方、相川さんの工場は、加熱して軟らかくしたプラスチックシートを真空装置で型に吸着させて形作る真空成形技術で、プラスチック製のコップを作っていた。

「これが畳めれば子どもたちが持ち帰りやすいのに」。1971年のある日、検尿コップを納めていた取引先社長のつぶやきに、相川さんは反応した。「イメージがピッと湧いた。円いから畳みにくい。四角くすればいい」

プラスチックを箱型にし、折り畳む線をつけて製品化すると、瞬く間に全国に普及した。1970年代には学校関係の検尿コップで七割のシェアを占めた。材料が弱く、製造過程で穴が開くことも多かったが、検品を徹底し、これまでクレームはゼロという。

さらに薄い材料を使って折り方を工夫し、よりコンパクトに畳める新製品を昨年末に発表した。

「進化する材料に対応して新しいものを生み出す。そのための金と労力は惜しまず技術を磨く」と相川さん。最近ではウイルス感染の判定などに使われる簡易検査キットの容器を開発するなど、活躍の場を広げている。

このような受賞の機会を頂きましたことは、皆様方の深いご厚情の賜物であると存じます。また、当社が昭和36年の設立から、多くの皆様方のご尽力により、こんにちがあるということを改めて知る思いしております。

このたびの受賞を受けましたことを胸に、更なる技術力の向上に注力し、皆様方のお役に立てる製品作りでご期待にお応えできるよう努力してまいりますので、今後とも、尚一層のご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

有限会社相川合成樹脂工業所  
代表取締役 相川 新太郎